

■会社訪問 株式会社 荘内銀行

荘内銀行に勤務されている二人の女性にお話を伺いました。

●江目美和さん(写真上)
●鈴木直子さん[KIDS 1才・2才]
(写真下)



働き続けるほうが自然でした。

結婚しても、出産しても仕事を続ける。しかもそれがあたりまえの会社…。今回は長年、企業におけるポジティブ・アクションに取り組まれ、平成17年に山形県内で初めて、均等推進企業表彰 厚生労働大臣優良賞を受賞された株式会社荘内銀行さんを訪問しました。



仕事と家庭の両立で一番のキーワードは「サポート」のようです。鈴木さんの場合は両方の親が子育てのサポートをしてくれているので助かっているそうです。でも彼女たちの最大のサポートは夫たちです。妻が選んだ時は自分で食事を作ったり、休日に家事を手伝ってくれたり彼らなりのやり方で支えてくれています。

男女共に、いきいきと働くため信頼できるサポート体制は、これから企業、行政、家庭、社会にもっともつと必要になるとでしょう。

※1 ポジティブ・アクション

過去の雇用慣行や性別役割分担意識などが原因で、男女労働者の間に事実上生じている格差の是正を目的として企業が行う取り組みのこと。

※2 均等推進企業表彰 厚生労働大臣優良賞

厚生労働省では、女性労働者の能力発揮を促進するため、他の模範ともいふべき取り組みを推進し、その成果が認められる企業を表彰している。

※3 モチベーション

仕事などに向かう意欲。

励してキャリアのステップアップにも力を入れており、結婚、出産によってキャリアが途絶えないよう個別アドバイスシステムなどもあるそうです。

その結果、結婚出産後も働き続ける女性が増えています。

しかし、男女が同等に働くということは仕事に対する責任も同等であるということ。江目さんの勤務体制は、出張所が年中無休で夜9時まで営業のためシフト制で早番・遅番もあります。鈴木さんは仕事と家庭を上手に両立していますが、毎日の生活のなかでは、両立するための工夫や努力があるようです。

の10.5年から平成18年には14.2年に伸び、女性の管理職の比率も平成14年の15.2%から平成18年には18.5%に上昇しました。男女の別なく半期ごとの面接で自己分析と実績を評価し、本人のモチベーションを高めてきました。また、行員が継続して働き、長期的なキャリアを形成していくためには、それぞれの行員のライフサイクルに合った働き方ができるようにすることが大事と考え、地域選択制を採用しているそうです。勤務地を限定できる地域限定型と転勤をとまなう一般型とがあり、本人の希望でコース転換が可能というものです。

さらに、個々人の能力開発を積極的に奨

江目(こうのめ)美和さんはジャスコ山形北店出張所の所長です。6名のスタッフと自分たちで企画を練りながら、地元密着の店舗作りをしています。最近、結婚しましたが「働き続けるほうが自然でした」と言います。

資産運用アドバイザーの鈴木直子さんは、一才と二才の子供のお母さんで今年4月に二度目の育休明けから復帰し、元のポストに戻ったそうです。「辞める、辞めないは個人の自由、でも結婚出産をきっかけに辞めたいと思わなかった」そうです。

荘内銀行は、「一人ひとりが能力を最大限に発揮できる風土を作ろう」という理念に基づき、行員が伸び伸びと働けることを目指しています。具体的には採用、人材育成、評価において差別をなくそうというものです。その結果、女性の勤続年数は平成11年



みんなが安心して暮らせる社会へ 山形県リハビリセンター

男女共同参画社会は、性別・年齢・障害の有無にかかわらず、安心して暮らせる社会を目指しています。そこで今回は、身体に障害のある方で、働く希望がありながら雇用されることが難しい方へ、就労の機会とその支援を提供する施設として、社会福祉法人山形県身体障害者福祉協会が運営する「山形県リハビリセンター」に取材に伺いました。



センターへ入所している杉本真理さんにお話を伺いました。(昭和49年、8ヶ月早産で生まれ脳性小児麻痺と診断され、障害が残り車椅子で生活しています。)

杉本さんの夢は何ですか？

親孝行したいです。私のために両親はたくさん苦労してきたので…。

いい方がいたら結婚したいです。自立し家族を安心させたいです。障害のある人もない人も、共に生活し活動できる社会になればいいと思います。

取材を終えて

バリアフリー(障壁がない)という言葉をよく耳にするようになった現代ですが、身障者用駐車スペースに一般の車が停めてあったり、道路や店の出入り口に自転車等が乱雑に置いてある光景をよく目にします。「いっばいだったから」「みんなもやっていたから」という安易な考え方がバリアフリーを壊していませんか？ 苦しい時代だからこそ他人を思いやる優しい心が必要ですね。心のバリアをなくして明るい社会になるよう、全てが一体となって努力していかなければと切に思いました。

しい織物でした。

10月22日(日)に福祉祭を実施するので、ぜひ、お越しくださいとのことでした。

リハビリセンターでの1日は？

午前6時30分に起床して、朝食の後、8時15分のラジオ体操で仕事が始まります。一般の会社と同じように昼休みや休憩があり、5時に仕事(さをり織り)を終了します。夕食後は、入浴をしたり友人と談笑したりして過ごしています。

現在は木曜日の音楽教室でキーボードを練習しています。難しいけれど楽しいです。バンドを組んで演奏する予定です。

障害者自立支援法施行後、生活は変わりましたか？

今年の4月からは利用料も倍以上になって大変です。外出するにはクラッチ(杖)や車椅子のため、タクシーが必要になります。

支給されるタクシー券は、どうしても行かなければならぬ病院などに利用しますが、足りなくなってしまう。バスを利用したくてもリフト付きバスはないので車椅子は乗れません。リハビリセンターからタクシーを使う時はなるべく仲間と乗合にして割り勘にしています。

生活するうえで困っていることはありませんか？

外出先で困ることはトイレが少ないことです。昔よりは良くなりましたが、やはり限られています。買い物をする時もスーパーの買い物カゴは持てないので、子供用の小さなカゴなどに入れてレジに出します。ユニバーサルデザイン(すべての人に使いやすい、能力の違いに関係なく使える)で作られたカートやカゴがあると助かります。

あとは、私たちが自立して自分らしく生活ができるよう、障害者も利用できるアパート・住居があればと思います。

山形県リハビリセンターは昭和43年に開所しました。センターに入所している方は20代から70代までの79人、デイサービスに通所されている方もいます。

作業場へ行くと実に多種多様なみなさん熱心に仕事をしていました。作業科目は、ご本人の希望や適性、障害に応じて選択できます。内容は、織物(さをり織り)、縫製(制服など)、簡易作業(電気カバーの洗浄など)、木工(たんすなどの骨組み加工など)で、企業の協力を得て実施しています。他に自主事業として、印刷、食品加工をしています。

縫製や木工は景気低迷などにより受注が減ってきました。

そこで大豆飲料「優豆生」やパパロアの製造を始めたそうです。城みさを先生が考案された「さをり織り」は温かい感じがする美



さをり織り